

## ■ ■ 三河南設楽郡より ■ ■ = = = ⇒おとら狐の話

わが郷里三河南設楽郡長篠村附近には、狐の話は数え切れぬほど多くある。就中われらの頭に最も深く入っているのはおとら狐の話であるが、それは他日別に掲載を乞うこととしよう。

△狐の中にはクダまたはクダン狐という一種がある。形小さくして鼪のようである。△「キャンキャン鳴きは吾喜ぶ、コンコン鳴きは人喜ぶ」などといって、狐は鳴き声で吉凶を知ることもある。また墓地に狐の糞のあるは吉しなどという。狐墓場に至り亡者に向い、供養追善の怠慢その他何か家の人に対して不足はないかと問う時、亡者何らの不平もなくまた依頼もなしと答うれば、狐怒ってその場に糞をして去るという。またこれと反対に家内のものを呪うことなど依頼するときは、狐喜んでコンコン鳴き、早速その人に取り憑くという。またはしたない詞であるが、狐の鳴き声は「霜月師走はのうかかさん、ちんぼかすもげるスココンコン」というなどという。その意味はよく分らねども、前の話とは一致せぬように思う。

△猫は狐と夫婦となるなどともいう。これなどは猫の生殖器より言い出したものだろう。狐に出逢った時は、「狐を食ったうまかった、まんだ奥歯にはさまっとる」といえば化かされることがないという。

△豊川の稲荷は元は平七稲荷と称えられた。昔平七という一人の棒手振があった。ある時豊川の辺りを通行すると、数多くの狐が集まって一つの土塀を越えんと競っていた。平七はこれを見てその群れに入り、真っ先に塀を乗り越えたところ、相貌たちどころに狐と変じ、すなわちその狐群の棟梁となり、終に稲荷に祭られるようになったという。これは少年のころある老人より聞いた話である。

△夜路をするとき提灯を前に掲げると狐にさらわれるという。それ故、後に負うがよいという。

△婚礼の行列に狐の混じり入り取り憑くという話がある。それ故に行列の家に入ると同時に、鉄砲を放して狐を逐うという風習がある。

△われらが隣村の某、師走の頃町へ出て正月の用に絹糸を多く買い入れ、暮方田圃の中を通ったところ、子供を負うた女が後から来て、あまり寒いから焚火をしようかという故、これに同意して田畔に腰を掛けると、女はどこからか杉の葉を一把かかえて来てマッチで火をつけて共に暖を取った。そのうち眠気を催してその場に寝てしまい、眼が覚めてみたら夜が明けていた。びっくりして傍らを見ると、絹糸は大部分灰になっている。女と思ったのは狐で、杉の葉と思ったのは自分の絹糸であつ

たことを知り、大いに口惜しがったという話を聞いたことがある。